

## 科学研究費助成事業 研究成果報告書

令和 3 年 6 月 3 日現在

機関番号：15401

研究種目：挑戦的研究(萌芽)

研究期間：2017～2020

課題番号：17K18645

研究課題名(和文)インクルーシブ教育システムの構築に向けた小学校外国語教育カリキュラムの開発的研究

研究課題名(英文)Curriculum Development in Elementary School Foreign Language Education for the Construction of Inclusive Education System

研究代表者

川合 紀宗(KAWAI, NORIMUNE)

広島大学・人間社会科学研究科(教)・教授

研究者番号：20467757

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 4,900,000円

研究成果の概要(和文)：本研究では、小学校外国語教育において、発達障害などの特別な支援を必要とする児童を中心とした多様な児童が参加できるカリキュラムや実践の在り方を検討・開発することを目的とした。学級担任や専科教員の授業分析や調査を通して、児童が外国語を学ぶ際に認められるつまづきを分析した。分析の結果、「聞くこと」、「読むこと」、「話すこと」、「書くこと」の4技能の他、母語に関連したつまづきや特別な教育的配慮に関する「複合的要因」について、比較的多くの児童に共通して認められるつまづきから、個別性の高いつまづきまで段階的に整理した。カリキュラム開発では、これらのつまづきポイントに対する指導ストラテジーを提案した。

研究成果の学術的意義や社会的意義

本研究の成果として3点があげられる。1つ目は、4技能の他、母語に関連したつまづきや特別な教育的配慮に関する「複合的要因」について、比較的多くの児童に共通して認められるつまづきから、個別性の高いつまづきまで存在することを明らかにしたこと、2つ目は、これらのつまづきポイントに対する指導ストラテジーを提案したこと、3つ目は、担任と専科教員とは、外国語教育に対する自信の度合いが異なり、例えば「聞くこと」では、英語教育経験が長い専科教員ほど指導に自信があるが、「母語のつまづき」では、勤務年数が長い担任ほど指導に自信があるという結果を得た。今後の担任と専科教員の連携の在り方についても示唆を与えた。

研究成果の概要(英文)：The purpose of the current study was to examine and develop a curriculum and practice in which a variety of students, mainly students with developmental disabilities, can participate in foreign language education classes in elementary schools. Through class activity analysis and a survey of classroom teachers and specialized teachers, the researchers analyzed the stumbling points that students experience when learning a foreign language. As a result of the analysis, in addition to the four skills of "listening," "reading," "speaking," and "writing," relatively "complex factors" related to stumbling and special educational considerations related to the mother tongue. From the stumbling blocks common to many students to the stumbling blocks that are highly individualized, we have organized them step by step. Curriculum development proposed a guidance strategy for these stumbling points.

研究分野：特別支援教育、音声言語病理学

キーワード：外国語教育 小学校 つまづき 英語 インクルーシブ教育

## 様式 C - 19、F - 19 - 1、Z - 19 (共通)

### 1. 研究開始当初の背景

国連「障害者の権利に関する条約」を批准した我が国では、インクルーシブ教育システムの構築は大きな課題であるが、教科等における具体的な合理的配慮や指導ストラテジーの提案はあまりなされてきていない実態がある(国立特別支援教育総合研究所、2015)。

小学校外国語活動は平成23年度に必修の領域として第5学年・第6学年に導入された。それまでなかった外国語の指導には課題も多く、さらに現在、高学年での教科化、中学年への外国語活動導入が検討中であり、小学校における外国語教育の指導力向上および環境整備は喫緊の課題である。

外国語教育は言語の習得を目指すだけでなく、文化や言語など多様性の理解・受容を扱うものであり、インクルーシブ教育の視点に通じるものである。「活動型」から入る小学校の外国語学習は、学習困難のある児童にとっても参加しやすいものである一方、今後の教科化により、音声だけでなく書字や文法に関する学習も導入されることが予想され、学習困難のある児童が苦手意識を覚える恐れがある。そのため、多様な児童が参加できる学習・指導の在り方を検討することが重要課題である。

### 2. 研究の目的

本研究の目的は、多様な児童が参加できる小学校外国語教育(活動)の在り方を、インクルーシブ教育と外国語教育の専門家の連携により検討し、効果検証に基づいて、実践への知見を提供することであった。

本研究では導入から日が浅く、母語でない言語を指導する難しさが指摘されている状況に加え、「高学年での教科化」や「導入学年の引き下げ」が検討され、小学校教員の指導力向上が喫緊の課題となっている外国語教育(活動)を取り扱うが、より大きな視点では、本研究が特別支援教育と各教科教育との連携研究推進の足がかりの役目を果たすこともねらいとした。

### 3. 研究の方法

現行学習指導要領に基づく外国語教育の実践および、教科化をにらんだ先進実践を行う研究開発学校等の実践を分析し、特に学習に支援が必要な児童のつまずき箇所を明らかにする。そのために、優れた実践の分析や外国語教育に携わる担任教員や専科教員へのインタビューや調査を通して児童が感じると予想される困難点を踏まえたインクルーシブな「学習内容」「教材」「指導ストラテジー」を開発した。

まず、担任や専科教員から見た小学生の外国語科におけるつまずきの実態及び担任や専科教員による「つまずき認知」の傾向を明らかにするために、広島県、島根県、鳥取県、愛媛県内の公立小学校計984校に対し、通常の学級の6年生担任及び専科に対する質問紙による調査の実施を、郵送により依頼した。その結果、260校に勤務する担任及び専科計305名から回答を得た。記入漏れや記入ミスが多数あった者を除き、有効回答者295名(担任235名、専科60名)を分析対象とした。また、対象者の一部に対して更なる詳細な情報を入手するために、インタビュー調査を行った。

### 4. 研究成果

#### (1) 児童のつまずきの実態に関する全般的な傾向

児童のつまずきの実態に関する全般的な傾向について、担任、専科を分けずに、指導者の領域ごとのつまずき認知率の平均値を算出したところ、「書くこと」が21.2%、「読むこと」が14.8%、「聞くこと」が14.1%、「話すこと」が12.4%、「複合的要因」が6.6%であった。領域間のつまずき認知率の有意差の有無を確認するために、クラスカル=ウォリス検定とSteel-Dwass法による多重比較を実施したところ、「複合的要因」が、他の領域よりも有意に認知率が低い(「話すこと」は5%水準、その他は1%水準)ことが分かった。また、「書くこと」と「読むこと」の間に有意差は認められなかったが、「書くこと」と「聞くこと」( $p = 0.06$ )、「書くこと」と「話すこと」( $p = 0.06$ )間には有意傾向が認められた。教科化に伴い、新たに設定された領域である「書くこと」「読むこと」のうち、特に「書くこと」については児童のつまずきが目立つ傾向にあることが考えられる。

次に、担任、専科が認知した児童のつまずきの実態について、認知率が高い順にその概要を述べる。担任、専科共につまずき認知率が高かった(「高 / 高」)項目数は57中4(7.0%)、担任または専科のいずれかのつまずき認知率が高く、もう一方が中程度であった(「高 / 中」または「中 / 高」)項目数は57中10(17.5%)、担任、専科共につまずき認知率が中程度であった(「中 / 中」)項目数は57中12(21.1%)、担任または専科のいずれかのつまずき認知率が中程度で、もう一方が低かった(「中 / 低」または「低 / 中」)項目数は57中12(21.1%)、担任、専科共につまずき認知率が低かった(「低 / 低」)項目数は57中19(33.3%)であった。

全般的な傾向としては、図1に示すとおり、担任、専科共につまずき認知率が低かった「低頻度項目」が最も多く、全項目数のほぼ3割を占めていた。このカテゴリーに該当する項目は、外国語教育に直接関係する4領域よりも複合的要因に関する項目が多くを占めており、母語でのつまずきや人間関係の構築など、外国語科以外においても学習上・生活上の困難を示す児童の

つまずき認知率が低い傾向にあることが分かる。ただし、「聞くこと」についてはこのカテゴリーの項目数の3割以上においてつまずき認知率が低い傾向にある。

「中 / 中」及び、「中 / 低」または「低 / 中」となった項目は同数であった。「中 / 低」または「低 / 中」に関しては、「書くこと」以外の4領域にまたがって認められ、中でも「聞くこと」「話すこと」に該当項目数が比較的多く認められた。「中 / 中」に関しては、「聞くこと」以外の領域に認められ、中でも「読むこと」と「話すこと」、「書くこと」に該当項目数が比較的多く認められた。「高 / 中」または「中 / 高」となった項目は、外国語教育に直接関係する4領域に認められ、中でも「聞くこと」「書くこと」に該当項目数が比較的多く認められた。

最後に、担任、専科共につまずき認知率が高かった「高 / 高」の項目数は全般的に少なく、「聞くこと」「書くこと」のみに認められた。ただし、「聞くこと」「書くこと」に関しては、担任または専科いずれかのつまずき認知率が高かった項目も含めると、「聞くこと」の項目の約4割、「書くこと」の項目の7割弱に対するつまずき認知率が高かった。

(項目数)

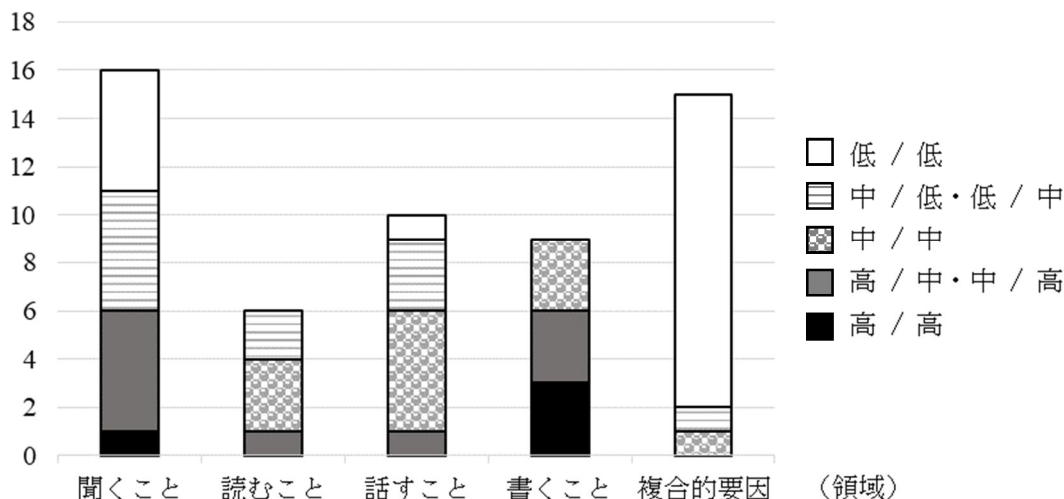


図1 教員による領域ごとのつまずき認知率の分布

## (2) 担任と専科による児童のつまずきの把握の差

担任と専科とでは各領域における認知率に差があるのか、また、担任、専科それぞれが5つの領域間で児童のつまずきの認知率に差があるのかについて検討するために、教員の属性(担任・専科)及び領域(聞くこと・読むこと・話すこと・書くこと・複合的要因)を独立変数、認知率を従属変数とし、クラスカル=ウォリス検定とSteel-Dwass法による多重比較を実施した。その結果、各領域において、教員の属性による認知率について有意差は認められなかった。なお、担任と専科それぞれのつまずき認知率は表1の通りである。

表1 担任と専科による児童のつまずき認知の差

領域	担任 (%)	専科 (%)
聞くこと	15.9	12.2
読むこと	15.6	13.5
話すこと	13.6	* 1.2
書くこと	23.5	* 18.8
複合的要因	6.5	7.1

$p < 0.5$  \*,  $p < 0.01$ \*\*

57の項目ごとに、担任と専科間のつまずき認知の程度に差があるかを分析した結果、いずれの項目においても有意差はなかった。しかしながら、多くの項目において、学級担任のつまずき認知率が数値的に高い傾向があり、領域ごとにまとめて平均値を比較してみると、表1のとおり、複合的要因を除く4つの領域において担任のつまずき認知率が高かった。

次に、各領域における担任と専科間の児童のつまずき認知率の差の有無について述べる。担任の場合、つまずき認知率は、「書くこと」、「聞くこと」、「読むこと」、「話すこと」、「複合的要因」の順に高かったのに対し、専科の場合は「書くこと」、「読むこと」、「聞くこと」、「話すこと」、

「複合的要因」の順に高く、「聞くこと」、「読むこと」のつまずき認知率の順に違いが認められた。先述の検定及び多重比較の結果、担任では、「複合的要因」と「書くこと」( $F(2) = 3.79$ ,  $p < 0.01$ )、「聞くこと」( $F(2) = 3.42$ ,  $p < 0.05$ )、「読むこと」( $F(2) = 3.13$ ,  $p < 0.05$ )、「話すこと」( $F(2) = 3.40$ ,  $p < 0.05$ )間にそれぞれ有意差が認められた。次に、専科の場合、「書くこと」と「複合的要因」間においては1%水準の有意差が認められたが、他の領域間には有意差は認められなかった。ただし、「読むこと」と「複合的要因」( $F(2) = 2.89$ ,  $p < 0.1$ )及び「書くこと」と「話すこと」( $F(2) = 2.93$ ,  $p < 0.1$ )の間には有意傾向が認められた。

このように、担任の場合、外国語教育に直接関わる4つの領域全てと「複合的要因」間のつまずき認知率に有意差が認められたが、専科の場合、「書くこと」と「複合的要因」のみに有意差が認められた。この点については、担任と専科間の児童を見る視点や外国語科の指導力の違いが考えられる。

### (3) 担任と専科による児童のつまずきに対する指導上の自信

英語学習における児童のつまずきチェック項目(57項目)に対して、主因子法による探索的因子分析を行った。当初5つのカテゴリーが想定されていたことを踏まえ、初回は5因子を仮定し、1つの因子にのみ絶対値.50以上の負荷を示し、複数因子への絶対値の差が.20以上であることを基準として分析後、項目選定を行った。該当しないものは20項目あったので、これらを削除し、因子数の見直しを行い、固有値の推移と累積寄与率の値を踏まえて、4因子解が妥当であると判断した。再度同様の方法で因子分析を行い、37項目4因子構造(つまずきチェックリスト第1版)を得た。

第1因子は、「児童の発音に誤りがあった際、正しい発音モデルを示しても、その音を出すことが難しい。」や「指導者が音声で既習の英文を示すと、音の認識はできるが、その文意をつかむことが難しい。」など、音声認識に関する因子と解釈し、「リスニングでのつまずき」因子と命名した。第2因子は、「母語である日本語であっても日本語の力が十分でなく友達との会話がうまくいかない。」や「母語である日本語であっても、単語や文の聞き取り、意味理解が難しい。」など、言語に関係なくつまずきを呈する因子と解釈し、「言語操作でのつまずき」因子と命名した。第3因子は、「大文字と小文字の形を区別して書くことが難しい。」や「形の似たアルファベットを混同して書いてしまう。」など、書字に関する因子と解釈し、「書字キーワード：でのつまずき」因子と命名した。最後に、第4因子は、「友達と英語で話すことへの苦手意識が強く、なかなか話せない。」や「英語を聞くことそのものに不安感・抵抗感がある。」など、苦手意識や不安に関する因子と判断し、「否定的感情喚起」因子と命名した。

さらに、上記で得られた4因子のそれぞれ第6位までの項目を合成し、その合成得点を従属変数として、「勤務年数」と「英語教育経験年数」、「特別支援教育経験年数」、「担任・専科の区別」の4つの独立変数を用いて、カテゴリカル回帰分析を行った。結果、リスニングに関する第1因子及び書字に関する第3因子については、専科教員で、英語教育経験が長い教員ほど、指導・支援に自信があるという結果を得た。一方、第2因子の母語でのつまずきについては、担任で勤務年数が長い教員ほど、指導・支援に自信があるという結果を得た。なお、第4因子については、有意な回帰式を得られなかった。

### (4) 考察と結語

本研究の結果、「聞くこと」、「読むこと」、「話すこと」、「書くこと」の4技能の他、母語に関連したつまずきや特別な教育的配慮に関する「複合的要因」について、比較的多くの児童に共通して認められるつまずきから、個別性の高いつまずきまで、網羅的に把握することができた。また、児童の多様なつまずきに対する学級担任と専科教員による認知率の差には統計的有意差はないものの、前述の4技能及び「複合的要因」の計5領域間における児童のつまずきの実態に対する学級担任、専科教員それぞれの認知率において、学級担任の場合、これら4技能に対するつまずき認知率が「複合的要因」に対するものよりも有意に高かったのに対し、専科教員の場合は、「書くこと」に対するつまずき認知率のみが「複合的要因」よりも有意に高かった。これらの結果から、学級担任と専科教員では児童が示す困難に対する異なる着眼点や見取り方がることが推測され、異なる専門性を持つ両者の視点を相補的に生かした支援の在り方を検討していくことの必要性が示唆された。

当初のチェック項目から複合的な因子と思われるつまずき項目が尺度化のプロセスの中でそぎ落とされてしまった。4技能間の関連性及び不安や苦手意識など感情には、結びつきが強い項目もあるため、児童のつまずきが見過ごされないように、さらなる項目の精選と再構成が望まれる。また、教員の属性(担任・専科)によってつまずき指導への自信の有無が異なることから、つまずき指導がそれぞれの属性でどのように行われているのか、個別にインタビューで確認するなど、指導・支援体制を整えるためのさらなる研究の必要性が示唆された。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計17件（うち査読付論文 11件 / うち国際共著 4件 / うちオープンアクセス 1件）

1. 著者名 川合紀宗・松宮奈賀子・大谷みどり	4. 巻 11
2. 論文標題 学習に困難のある児童生徒はどんな点でつまづくか	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 『英語教育』2019年11月号	6. 最初と最後の頁 24-25
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -
1. 著者名 川合紀宗	4. 巻 11
2. 論文標題 合理的配慮に対する校長としての取り組みの在り方 インクルーシブ教育システム推進のために	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 『月刊プリンシパル』11月号	6. 最初と最後の頁 12-15
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -
1. 著者名 Kawai, N., Matsumiya, N., Otani, M., Kawatani, N., & Ward, W. J.	4. 巻 18
2. 論文標題 Inclusive Education for Foreign Students with Special Needs in Japan: An Approach by the Maximizing Potential in Japan International Academy	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 広島大学大学院教育学研究科附属特別支援教育実践センター研究紀要	6. 最初と最後の頁 91-98
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 該当する
1. 著者名 Almutairi Areej, Kawai Norimune, Alharbi Abeer	4. 巻 28
2. 論文標題 Faculty Members' and Administrators' Attitudes on Integrating Students with Intellectual Disability into Postsecondary Education	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 Exceptionality	6. 最初と最後の頁 1~12
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.1080/09362835.2020.1727330	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 該当する

1. 著者名 Pov Sokunrith、Kawai Norimune、Murakami Rie	4. 巻 24
2. 論文標題 Identifying causes of lower secondary school dropout in Cambodia: a two-level hierarchical linear model	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 International Journal of Inclusive Education	6. 最初と最後の頁 1~14
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) 10.1080/13603116.2020.1735542	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 該当する

1. 著者名 本田 勝久 , 松宮 奈賀子 , 山本 長紀 , 田所 貴大 , 建内 高昭 , 星加 真実 , 染谷 藤重	4. 巻 19
2. 論文標題 小学校英語教員養成の高度化に関するカリキュラム策定 : 東アジア諸国における教科専門科目の位置づけ	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 JES journal	6. 最初と最後の頁 212-227
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 深澤 清治 , 松浦 武人 , 松宮 奈賀子 , 渡邊 巧 , 伊藤 健志朗 , 榎原 朱梨 , 小松 薫穂 , 福田 麟太郎 , 藤井 志保 , 宮島 侑希 , 八島 恵美 , 渡部 真吾	4. 巻 25
2. 論文標題 大学院生によるアメリカの小中学校での体験型海外教育実地研究報告(12)	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 学校教育実践学研究	6. 最初と最後の頁 109-117
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 松宮 奈賀子 , 幡井 理恵	4. 巻 8
2. 論文標題 小学校教員を目指す学生のTeacher Talkに関する気づきの変容	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 初等教育カリキュラム研究	6. 最初と最後の頁 37-48
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 川合紀宗	4. 巻 27
2. 論文標題 米国の通常の学級におけるインクルーシブ教育の実践 学びのユニバーサルデザインを基盤とした協同学習やピア・チュータリングを中心に	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 LD研究	6. 最初と最後の頁 373-378
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 Basister, P. M. & Kawai, N.	4. 巻 22
2. 論文標題 Japan's educational practices for mathematically gifted students.	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 International Journal of Inclusive Education	6. 最初と最後の頁 1-29
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) 10.1080/13603116.2017.1420252	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 Tatsuta, M., Kawai, N., & Ushiyama, M.	4. 巻 6
2. 論文標題 Quality of life of people with intellectual disabilities: Current trends in Denmark	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 Journal of Special Education Research	6. 最初と最後の頁 1-11
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 Atika, I. N., Ediyanto, E., & Kawai, N.	4. 巻 2
2. 論文標題 Improving Deaf and Hard of Hearing Students' Achievements Using STS Approach: A Literature Review	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 International Journal of Pedagogy and Teacher Education	6. 最初と最後の頁 13-24
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 Ediyanto, Mulyadi, A., Supriatna, A., & Kawai, N.	4. 巻 5
2. 論文標題 The Education and Training Program GUIDELINE for Special Guidance Teacher Competence Development	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 Indonesian Journal of Disability Studies	6. 最初と最後の頁 251-267
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) 10.21776/ub.IJDS.2018.005.02.15	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 中山 晃	4. 巻 17
2. 論文標題 Belief-Mediation Model: Role of self-confidence beliefs in a latent factor model of Japanese intermediate English as a foreign language learners	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 大学教育実践ジャーナル	6. 最初と最後の頁 1-8
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 Basister Michel P., Kawai Norimune	4. 巻 22
2. 論文標題 Japan's educational practices for mathematically gifted students	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 International Journal of Inclusive Education	6. 最初と最後の頁 1~29
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) 10.1080/13603116.2017.1420252	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 該当する

1. 著者名 松宮奈賀子・幡井理恵	4. 巻 36
2. 論文標題 小学校英語授業におけるTeacher Talkの工夫に対する大学生の気付きの検討	5. 発行年 2017年
3. 雑誌名 日本児童英語教育学会 (JASTEC) 研究紀要	6. 最初と最後の頁 89-105
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -



1. 著者名 田村緑・川合紀宗	4. 巻 16
2. 論文標題 小学校における交流及び共同学習の現状と課題に関する研究 - 教科におけるアクティブな「協同」学習を目指して -	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 広島大学大学院教育学研究科附属特別支援教育実践センター研究紀要	6. 最初と最後の頁 93-102
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計20件 (うち招待講演 3件 / うち国際学会 4件)

1. 発表者名 Kawai, N., Matsumiya, N., Otani, M., & Nakayama A.
2. 発表標題 Errors in English Learning for Japanese Elementary School Students with Communication and/or Learning Difficulties
3. 学会等名 The 2019 ASHA (American Speech-Language-Hearing Association) Convention (国際学会)
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 松宮奈賀子・川合紀宗
2. 発表標題 小学校教員を目指す大学生の児童に向けた英語の語り：語りの特徴と学生自身による課題の認識
3. 学会等名 小学校英語教育学会
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 川合紀宗
2. 発表標題 インクルーシブ教育システムの構築 - 日本語教育との連携を目指して
3. 学会等名 子どもの日本語教育研究会第4回ワークショップ (招待講演)
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 Kawai, N.
2. 発表標題 Unfamiliar with AAC Implementation? : Let's start with mid-tech AAC devices
3. 学会等名 Second East Asian Regional Conference on Augmentative and Alternative Communication (AAC): Uniting local and international perspectives (招待講演) (国際学会)
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 川合 紀宗
2. 発表標題 自閉症スペクトラム児童に対する外国語教育の実践 - 外国語の伸びが母語の伸びに影響を与えた事例 -
3. 学会等名 第18回小学校英語教育学会 長崎大会
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 本田 勝久・建内 高昭・松宮 奈賀子・山本 長紀・星加 真実・染谷 藤重・田所 貴大
2. 発表標題 小学校英語教員養成の高度化に関するカリキュラム策定 - 東アジア諸国における教科専門科目の位置づけ -
3. 学会等名 第18回小学校英語教育学会 長崎大会 (招待講演)
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 大谷 みどり
2. 発表標題 英語学習における支援の試み～海外の外国語教育における支援例をもとに
3. 学会等名 第18回小学校英語教育学会 長崎大会
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 松宮 奈賀子・幡井 理恵
2. 発表標題 小学校英語授業におけるTeacher Talkの工夫 - 明示的指導の効果に関する大学院生を対象としたパイロット調査 -
3. 学会等名 第18回小学校英語教育学会 長崎大会
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 大谷 みどり・樋口 和彦・宮崎 紀雅・縄手 雅彦・川合 紀宗
2. 発表標題 通常学級の英語授業における児童生徒のつまずきと支援の在り方
3. 学会等名 日本LD学会第29回大会
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 中山 晃
2. 発表標題 児童・生徒の英語でのパフォーマンス評価のためのルートマップ的ルーブリックの開発
3. 学会等名 平成30年度JACET中国・四国支部春季研究大会
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 中山 晃・塚田初美・三浦優生
2. 発表標題 ルートマップ的ルーブリックによる外国語活動での児童生徒のパフォーマンス評価 - 特別支援学級での実践を通して -
3. 学会等名 日本教育心理学会第60回総会
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 中山 晃
2. 発表標題 ティーチング・ポートフォリオとアカデミック・ポートフォリオの違いについて
3. 学会等名 平成30年度JACET中国・四国支部秋季研究大会
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 大谷みどり・築道和明・飯島睦美
2. 発表標題 常学級の外国語活動における支援の在り方を考える～特別支援教育の視点から～
3. 学会等名 小学校英語教育学会
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 三浦睦美・大谷みどり・樋口和彦・小川巖・三島修司
2. 発表標題 UDL (Universal Design for Learning) の視点による 中学校3年理科(物理)の授業改善 現状把握に基づき、主体的に学ぶ生徒の育成を目指したオプション(学び方の選択肢)の提供
3. 学会等名 日本特殊教育学会
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 大谷みどり三浦睦美・飯島睦美・小川巖・樋口和彦・宮崎紀雅・築道和明
2. 発表標題 英語教育における特別な支援の在り方～小中高大の連携を通して(1)：UDLを活用した今後の教員養成に向けての取組
3. 学会等名 日本LD学会
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 飯島睦美、大谷みどり・築道和明・小川巖・樋口和彦・宮崎紀雅・三浦睦美
2. 発表標題 英語教育における特別な支援の在り方～小中高大の連携を通して(2)：音韻意識改善と英語学習困難の解決
3. 学会等名 日本LD学会
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 本田勝久・建内高昭・松宮奈賀子
2. 発表標題 Teacher training standards for primary English education in Japan: Practical seminar for the teaching profession
3. 学会等名 The third global teacher education summit (国際学会)
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 本田勝久・建内高昭・松宮奈賀子・山本長紀・星加真実・染谷藤重・田所貴大
2. 発表標題 小学校英語教員養成の高度化に関するカリキュラム策定に向けて - 台湾における教科専門科目の位置づけ -
3. 学会等名 日本児童英語教育学会 (JASTEC) 第37回秋季研究大会
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 松宮奈賀子
2. 発表標題 小学校外国語(英語)の指導にあたる教員に求められる英語力の具体を探る
3. 学会等名 日本教科教育学会
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 Kawai Norimune, Kobayashi Hiroaki, Hara Yuki, Miyamoto Shoko, Matsumiya Nagako
2. 発表標題 Types of Reasonable Accommodations Classroom Teachers to Provide for Middle-High School Students Who Stutter
3. 学会等名 American Speech-Language-Hearing Association (国際学会)
4. 発表年 2017年

〔図書〕 計6件

1. 著者名 樋口忠彦、泉 恵美子、加賀田哲也、松宮奈賀子 他	4. 発行年 2019年
2. 出版社 研究社	5. 総ページ数 240
3. 書名 小学校英語内容論入門	

1. 著者名 金森 強 (編)・中山 晃 (共著)	4. 発行年 2019年
2. 出版社 成美堂	5. 総ページ数 256
3. 書名 小学校英語科教育法	

1. 著者名 上野一彦・大谷みどり他	4. 発行年 2017年
2. 出版社 明治図書	5. 総ページ数 117
3. 書名 学習指導要領改訂のポイント「通常の学級の特別支援教育」	

1. 著者名 金森強・本多敏幸・泉恵美子・大谷みどり 他	4. 発行年 2017年
2. 出版社 教育出版	5. 総ページ数 212
3. 書名 主体的な学びをめざす小学校英語教育 教科化からの新しい展開	

1. 著者名 Judit Cormos, Anne Margaret Smith (著)・竹田契一(監訳)・飯島睦美・大谷みどり・川合紀宗・築道 和明・村上加代子・村田美和(訳)	4. 発行年 2017年
2. 出版社 明石書店	5. 総ページ数 310
3. 書名 学習障がいのある児童・生徒のための外国語教育：その基本概念、指導方法、アセスメント、関連機関と の連携	

1. 著者名 無藤隆(編)・川合紀宗 他(著)	4. 発行年 2017年
2. 出版社 明治図書	5. 総ページ数 168
3. 書名 平成29年版 中学校新学習指導要領の展開 総則編	

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究分担者	大谷 みどり  (Otani Midori)  (80533299)	島根大学・学術研究院教育学系・教授   (15201)	
研究分担者	中山 晃  (Nakayama Akira)  (70364495)	愛媛大学・教育・学生支援機構・准教授   (16301)	

## 6. 研究組織（つづき）

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究 分担者	松宮 奈賀子  (Matsumiya Nagako)  (70342326)	広島大学・人間社会科学研究科(教)・准教授    (15401)	

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究 協力者	山下 桂世子  (Yamashita Kayoko)		
研究 協力者	ハリス カレン  (Harris Karen)		
研究 協力者	グレアム スティーブ  (Graham Steve)		
研究 協力者	ソクンリス ポブ  (Sokunrith Pov)		
研究 協力者	バシスター マイケル  (Basister Michel)		
研究 協力者	エディヤント  (Ediyanto)		



6. 研究組織（つづき）

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究協力者	イファ ナンディア アティカ  (Iva Nandya Atika)		

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関			
インドネシア	インドネシア教育省	Malang State University	Universitas Islam Yogyakarta	
英国	Ashbrook School			
フィリピン	University of Nueva Caceres			
カンボジア	カンボジア教育省			